

「窮屈さ」の中で山と向き合う—北海道大学山スキー部におけるスポーツ登山実践—

廣野龍

キーワード：大学山岳部、アサイラム、スポーツ登山 (mountaineering)、アドベンチャー・レクリエーション、シリアスレジャー

## 要 旨

本稿は、北海道大学に所属する部活動である「北海道大学山スキー部」をフィールドに、部内外に存在する「窮屈な」現状に着目して描写した研究であり、その目的は、このような現状の中で部員たちがどのように登山活動と向き合っているのか、そしてこの状況をどのように捉えているのかという、人々のありようを明らかにすることにある。

第1章では、研究に至った背景と本稿の研究目的を述べる。

第2章では本研究において鍵概念となる「全制的施設」について説明するとともに、多義的な活動を包括する「登山」という語句の整理によって山スキー部で行われる活動を「スポーツ登山」として定義し、大学所属山岳系部活に関する先行研究を参照する。これらによって本論の意義を導き出すとともに、本研究における設問を明確化させる。

第3章では、調査の概要と調査倫理について述べる。

第4章では、現在の山スキー部を取り巻く状況や、内部の機構について描写することによって「窮屈な」山スキー部の現状を浮かび上がらせ、そのような現状の中で、実際にどのように登山が行われているのかを筆者の経験をもとに記述し、部員へのインタビューや部員の語りの収集によって、部員が部活動や登山活動を行う動機と思考を明らかにする。

第5章では調査によって得られた事項から、「全制的施設」に関する考察を深化させることによって、山スキー部員たちを縛りつける「全制的施設の状況」の存在を指摘する。そして、部員が登山を行う動機として語られた「自己表現」が、「スポーツ登山」という活動において如何にして成立するのかを考察する中で、「全制的施設の」なものも含めた「山スキー部」という枠組みが果たす「箱庭」のような役割が明らかになる。この「箱庭」は、部員たちが安全を追求する中でも充実した登山体験を得るためには重要なものだった。また、部員たちの志向、大学との関係について多角的に考察を加える。

第6章では全体の総括と今後の課題を述べる。この研究で浮かび上がってきたのは、登山を始めてから数年に満たない者のみで構成され、かつ大学に所属する「部活」という組織においてスポーツ登山というハイリスクな活動を行う中で部内、そして大学との関係で生じる個人と組織との間の折衝であり、それによって生じる「全制的施設の状況」は部

員を「縛る」だけでなく、部員たちがより安全を希求しながら一人前の「ヤマヤ」となるための「枠組み」ともなっているという一面的には語ることはできない存在だった。